

第26回

鈴木輝隆さん

今回のゲストは鈴木輝隆さん。
現在は江戸川大学・社会学部で
地域経営や住民自治を専門に教鞭を執る同氏。
これまで、山梨県庁やシンクタンクで
“地域づくり”について研究する傍ら、
過去30年以上に渡りライフワークとして、
日本全国のまちづくりや地域活性化に熱心な
リーダーを、自身の足で訪ね歩いてきたという
ユニークな経験を持つ。

観光地として、豊かな自然や独自の文化が残る
“ローカル”に注目が集まる中、数々の現場を
巡り歩いてきた同氏に、元気のローカルの
特徴や共通点を聞き、観光立国のヒントを探る

聞き手:丸々もとお(夜景評論家・夜景プロデューサー)

観光立国宣言!



ローカルを訪ねる

丸々 (以下、丸) 著書『ローカルでざいんのおと 田舎意匠帳』(全国林業改良普及協会)では、鈴木さんがこれまで出会った、日本各地のまちづくりや地域ブランディングを積極的に行っている“面白いまち”と、そのリーダーとして活躍する“面白い人”の活動を紹介しています。この本を出すきっかけは何だったのですか？

鈴木 (以下、鈴) 全国各地のまちと出会った人について、ある編集者に語ったことです。もともと地方のまちを歩くことが好きで、人に「面白い街があるよ」と聞いては、そこを訪ね、地域のリーダーや地域活動を支える住民に会って話を聞くということを30年以上続けてきました。そこで感じたことや、地域のリアルな現状を話すと、編集者は大変興味を示し、そこから月刊『林業新知識』という専門誌に、まちづくりという視点から私が歩いたローカルについて、詳しく書いて欲しいと依頼されました。2001年1月から4年間『まちが面白い ひとが面白い』というタイトルで連載し、この本は、それをまとめた1冊という訳です。さまざま地域を訪ね歩き、官民隔てなくユニークな地域リーダーに行ったインタビューをメインに、北海道の下川町から鹿児島島の種子島まで、44のリアルなローカル像を記しています。

丸 30年以上、地方のまちを巡り歩いているという、そのきっかけはどういうものだったのでしょうか？

鈴 旅は子供の頃から好きでしたが、山梨県庁時代の研究会の活動が直接のきっかけですね。大学卒業後、神戸市役所に2年ほど勤めたのですが、自然や田舎が好きだったということもあり、山梨県に転居して県庁に勤め、地域資源を生かしたまちづくりや地域振興の政策に携わりました。熱心な住民や自治体職員との協働は充実したものでした。一方で県職員は、2~3年で部署を異動してしまうため、担当者が変わることによってこれまで一緒にやってきたことが、半ばリセットされ、結局は住民を裏切ってしまうのではという不安もありました。そこで立場に関係なく、地域について考えようと、「落穂拾いの会」という名の研究会を設立しました。実にさまざまな立場の方が参加し、県内各地で地域づくりの勉強会を開き、同じような活動をしている地域を訪れ、意見交換会を開いたりしていました。そのうち、毎回、新鮮な驚きや感動を与えてくれる“ローカル”の魅力にハマリ、研究会と関係なく週末は日本各地のまちを訪ね歩くようになり、これがライフワークとなりました。その記録をまとめ、地域の成功事例を研究していると、今度は若い世代にもけて、日本のローカルのことを教えてみないかと大学から声がかかり、現在に至るという訳です。

“ローカルデザイン”

丸 著書のタイトルにもある“ローカルデザイン”とは、どのような意味なのでしょう？

鈴 よく、日本の地方のまちは、僻地や過疎地として括られ、地理的にも不利で経済的にも活

力が無いことから、衰退の一途をたどるエリアだと考えられています。一方で、ゆったりとした時間、豊かな自然、伝統・文化などに魅力を感じて、都市から移住する人も増えているのも、また事実です。日本には、これら自然風景や伝統、文化などを地域資源として認識を深め、活用し、地域の魅力を発信しようと活動しているローカルがたくさんあります。

私が言う“ローカルデザイン”とは、単なる景観やモノのかたちのデザインではなく、“ローカル”で暮らしを豊かにしようとする田舎の人々の、自然観や創意工夫、ライフスタイルやメンタリティー、そしてそこから生まれたプロダクトに現れてくる、“地域個性の凝集・表出作用”をさしています。分かりやすく言えば、地域特性が現れたモノやコトを発信していくための“仕組みのデザイン”とも言えるでしょう。

丸 ローカルが生き残るには、こういった仕組みづくりが、今後必要だということでしょうか？

鈴 そうです。日本の地方にある豊かな風景や、オリジナリティー溢れる伝統や文化は、後世に残すべき大切なものです。決して感傷的に言っている訳ではなく、これらは、例えば観光客誘致において、世界に日本の魅力をアピールする際にも活用できる重要な資源となるからです。ローカルデザインの目的は、その資源となる風景や風土を残すことにあります。例えば一面のブドウ畑の風景が美しい地域があったとします。これを残すにはどうすれば良いか。畑を残すには、作り続けることが必要です。そのためにはブドウが必要とされる状況を作る。例えばそれを使



すずき・てるたか（写真左）

1949年名古屋生まれ。1973年北海道大学卒業後、神戸市役所、山梨県庁、総合研究開発機構を経て、2000年より現職。国土交通省「国土審議会計画部会ライフスタイル・生活専門部会」専門委員、国土交通省「地域づくりネットワーク形成調査研究会」座長を歴任する傍ら、ライフワークの田舎めぐりを30年以上続ける。著書に「ろーかるでざいんのおと田舎意匠帳」（全国林業改良普及協会）など

って地元でワインを作る。そうすれば、ブドウの供給も安定し、ワインという新たな産品が出来、それを売ることで経済的にも潤う。つまり、風景を残すために、地域に根差した産業を興す、または復活させ、経済的に自立するということが必要なのです。そこで初めて人、技、生活、文化、産業の風景が伝承できる訳です。

丸 “ローカル”の専門家として、国や自治体などの委員会で政策提言するだけでなく、より地域や住民に近い立場で、まちづくりなどのアドバイザーを務めることも多いと聞きます。最近はどうようなプロジェクトに関わっていらっしゃるのでしょうか？

鈴 最近の例で言うと、山梨県北杜市の津金での、NPO法人文化資源活用協会（文資協）との活動があります。津金は、八ヶ岳南麓の小さな町です。山梨はブドウの栽培で有名なのですが、ここは30年以上前からリンゴも栽培している珍しい地域です。ただ集落130戸のうち空き家が41戸、独居老人が39戸と過疎化が進み“風景”が崩れてきていました。そこで、特産のリンゴも使って、何か出来ないかと文資協が動き始め、地元の農家に話を聞いていたところ、昔から、出荷した残りのリンゴを手絞りで自家製ジュースとして飲んでいるという話が出てきました。飲んでみると本当に美味しいし、これを地元だけで楽しむのはもったいないということで、商品化して新たな特産品としました。また、このエリアは空き家が多く、それらを地元住民と学生、そして建築の専門家などの力で改修し、都市の若者との交流の場としたり、廃校になった明治

時代の学校舎のレトロな雰囲気を活用・改修して、カフェとしてオープンさせるといった事業も行っていきます。

少し変わったものでは、「銀座ミツバチプロジェクト」にも関わっています。銀座3丁目のビルの屋上に、巣箱を置き養蜂するというものです。このエリアに店を構えるパティシエやバーの店主などが参加していて、採れたハチミツは彼らの店でオリジナル料理として出されます。銀座というと、メディアにも多く取り上げられ、ブランドショップが並ぶ場所というイメージが強くなっています。そうではなくて、養蜂を通じてすぐ近くに自然があるという意外な一面を紹介することで、銀座こそ生活の中からモノづくりをしてきた、“地域の歴史”があるという、銀座の魅力の本質に目を向けてもらうのが、プロジェクトの狙いです。

ジュースにしる、ハチミツにしる、どれもその土地で生産されたものです。地域ならではのことをやろうとしたら、自分たちが作る喜びと誇りを伝えること、それはつまり品質をデザインすることが大切です。大変ですが、土地の魅力を表現するための確実な方法だと思います。

知的好奇心を刺激する

丸 これまで出会ってきた地域リーダーの間に、何か共通点はありますか？

鈴 一つは前向きであり、柔軟で寛容だという点です。行政は何もしてくれないと嘆く人がいますが、地域リーダーは、それなら自分でやる方法でやろう。そのうち行政が手を貸してく

れるようになれば、それはそれで協力してもらおうという姿勢で活動しています。また「事業半分、検証半分」とゆったりと構え、「成功するまで続ければ、失敗ではない」というように、楽観的にやっているような人も多いですね。

また、知的刺激を与え合いその相互作用を楽しむようなところがあります。彼らと話していると、そんな視点もあったのかと改めて地域の魅力に覚醒することが多々あります。

私がローカルを巡り歩いている理由は、そういった知的刺激を与え合うことが楽しいからです。異質な発想や見たことのない出会いに本当にドキドキします。この世は知らないことだらけだと単純に驚き、それを解明し、見える形にデザインする。それが本当に楽しい。

名所や旧跡を観に行く“イメージの確認”が観光なのではなく、こういったコミュニケーションを伴う知的刺激を得て覚醒することこそが観光です。これを求める人が増え、その受け皿と仕組みをデザインすれば、これからのローカルはもっと魅力的なものになっていくのではないのでしょうか。

丸 本日はありがとうございました。

対談を終えて

その土地の本質的な意味での“観光”振興に従事する方々に30年以上かけて出会ってきた鈴木氏。対談のプロに対談する今回は、私にとって光栄な機会であった。現場での密なるコミュニケーションが推し量られるほど、対談も実に和やかでサービス精神の溢れるものとなった。結果、ここでは書ききれないほど参考になるお話ばかりだったが、「事業半分、検証半分」という言葉が、まちおこしを手がける私にとっては特に印象的だった。成功するまで続ければ失敗はないという考え方。確かにそうだ。事業は計画内で結果が求められるものだが、その後の検証も踏まえて成功を導き出すものなのだ。力が入り過ぎるよりも、このくらい柔軟で寛容な思考の方が、持続的なまちおこしも可能になってくるだろう。そして、もうひとつ。ローカルで多くの体験を積むゼミ生を語る鈴木氏の顔が実に生き生きとしていた。人間性を育てるような、かけがえない実際的な体験をして欲しいという想いがひしひしと伝わってくるのだ。ローカルの将来とそれを支える人材の将来を見つめる愛情が重なってみえた。

まるまる・もとお／夜景評論家・夜景プランナー

立教大学社会学部観光観光学科卒。著書は30冊を超え、学際的な夜景評論を得意とする。ホテル、展望台、レストラン&バー、高層マンションのプロデュースや販促企画の他、神戸市、長崎市での夜景観光まちおこしにも携わる。夜景観光案内所を併設するレストラン「NEXT YOKOHAMA BAY」も運営。横浜ランドマークタワーの展望台では、夜景イベント「スカイマーメイド」をプロデュース（～2009年5月17日）。[スーパー夜景サイト] <http://www.superyakei.com>